『理論と動態』 社会理論・動態研究所 1: 72-90 2008.11 査読有

# 殉国と投企――特攻隊員の必死の構造

敵機動部隊が再び本土に接近してきた。一時間半後に、私は特攻隊員として、ここを出撃する。秋の立った空はあくまで蒼く深い。八月九日！ この日、私は、新鋭機流星を駆って、米空母に体当りするのである。ご両親はじめ、皆様さようなら。戦友諸君、有難う[日本戦没 1995: 395-396]。

## Ⅰ 関心と課題

1944 年 10 月 20 日、フィリピン駐留の第一航空艦隊に命令が発せられた。「現戦局に鑑み艦上戦闘機（現有兵力）をもって体当り攻撃隊を編成す（体当り機十三機）本攻撃隊を神風（じんぷう）特別攻撃隊と呼称す」[毎日新聞社 1979: 49]。司令長官の大西瀧治郎中将は、24 人の神風特別攻撃隊員（以下特攻隊員）に、次のように訓示した。「日本は、正に危機である。しかも、この危機を救い得るものは、大臣でも大将でも軍司令部長でもない。もちろん、自分のような長官でもない。それは諸子の如き純真にして気力に満ちた若い人々のみである。従って自分は一億国民に代わり、皆に、お願いする。どうか、成功を祈る。……皆は、すでに神である。神であるから欲望は無いであろう。が、もし、あるとすれば、それは自分の体当たりが、無駄ではなかったか、どうか、それを知りたいことであろう。しかし皆は永い眠りにつくのであるから、残念ながら知ることも出来ないし、知らせることも出来ない。だが、自分は、これを見届けて、必ず上聞（じょうぶん）に達する（天皇に上奏する―引用者）ようにするから、そこは、安心して行ってくれ……しっかり頼む」[生田 1977: 71]。

こうして特攻作戦が始まった[1)]。多くの若者が、青空に飛び立ち、敵艦・敵機に突入した。特攻作戦は、世界の戦争に例を見ない。特攻隊員は、捨身の殉国の士である。そうした特異な位置ゆえに、特攻隊員の記録は多い。そして多様な特攻隊言説が紡がれた。そこに多様な思想が介在した。ゆえに特攻隊員像の把捉は容易でない。特攻隊員はどんな思いで死に臨んだのか。その実相を知るには、特攻隊員の手記（遺書、日記、手紙、メモ）を読み、彼らの世界に沈潜し、彼らの目線と言葉で、彼らの世界を探索するしかない。そして、彼らの「心情」（感情、信条、思想）の構造を抽出し、その全体像を解釈するしかない。我々の前にあるのは、いつも一つの像でしかない。これが本稿の前提である。本稿の課題は 2 つある。一つ、特攻隊員は死をどう意味づけたのか。その死の意味を分析し、意味の構造を抽出し、解釈することである。二つ、特攻隊員は死をどう実践したのか。その死の実践を分析し、死の過程を抽出し、解釈することである。もって本稿は、特攻隊員の心情の全体像に迫る。しかしそれは、仮説上の構築物である。「実像」との遠い距離。その乖離にしばしば呆然とする。

## Ⅱ 資料のこと

特攻隊員の死の意味／実践を分析する際、資料に関わる制約がある。筆者には、十分な資料を収

集する条件がない。ゆえに参照できた限りの資料に依るしかない。本稿では、特攻隊員の手記を収めた（再録した）文献として、[大貫 2003; 2006][小田切 1970][海軍飛行 1995][北川 1967][桑原 2006][東大戦歿 1947][日本戦没 1995; 2003][白鷗遺族会 1992][林 1967][辺見 2002][真継 1994][森岡 1995a; 1995b][わだつみ会編 1993]を参照した。戦没兵士全般の手記を収めた文献では、特攻隊員の手記を抜き出した。特攻隊員の手記は、他の戦没兵士と比べて多い。それは、特攻隊員には「自分の死期を予見できた、出撃基地が主に内地だったので手記が残りやすかった、同じ戦線から戦死者を多く出したため手記が出版されやすかった」[中村 2006: 302]からである。特攻隊員が世間の注目を浴びたという事情もある。筆者が参照できた手記は少ない。しかも原資料に当れていない。

次に、手記に関わる制約である。一つ、手記（集）は、特定の編集方針の下にある。どんな手記も、事実をすべて網羅することはできない。そこにはかならず、事実の取捨選択がある。とすれば読者は、編集方針を明確に捉え、それを距離化して読むしかない。ただし、中身が改竄（文言の削除や文章の切断を含め）された場合は、原資料に当れない筆者に修復の術がない。二つ、我々が読めるのは、出版された手記だけである。出版されなかった手記もある。手記を書かなかった特攻隊員もいる。彼らの心情は知ることができない。たとえば 14～15 歳で入隊し、「悩むべき価値がなんなのかさえ分から」[保阪 2002: 109]ず、その心情を記述する術も十分でなかった少年飛行兵には、手記は少ない。一般に戦没者の手記には、書き手に高学歴者への偏りがある[森岡 1995a: 19]。三つ、手記自体がもつ制約である。手記は、書かれた時期（入隊した時、特攻隊員に志願した時、出撃命令が出た時）、特攻をめぐる状況（特攻死が聖視された初期のフィリピン戦、その視線が褪せた後期の沖縄戦）により、心情も書き方も異なる。手記の宛先によっても異なる。さらに検閲の問題がある。「一体、日本の軍隊内の日記や手記に對する検閲は、……後世の人々には想像を絶するほど嚴重をきわめたものであつた」[東大戦歿 1947: 245]。ゆえに手記は信頼性に欠ける[森岡 1995a: 20-22]。特攻隊員は、検閲をパスするよう、また親に心配かけないよう、世間並みの表現で、型通りの手紙を書いた[小田切 1970: 313]。また、「『英霊』の遺文として展示されるという上官の訓示の後で書かれた」[大貫 2003: 292-293]手記もある。こうした事情から、手記の読者は、心情が加工された文章の行間を読まなければならない。しかしそれには限度がある。ただし、士官（少尉以上）であった特攻隊員には、検閲を受けなかった時もある。その手紙はこの限りでない。

本稿が参照した資料には、これらの制約がある。ゆえに筆者は、筆者の関心に沿い、手記を丹念に読み、記述の細部に分け入り、文章を分析し、関連文献の情報と照合する（状況への脈絡化）ことで、資料の制約を軽減するしかない。また、「資料全体を一つのプールとして扱い、そこに認められている共通特徴を取り上げて論じる」[森岡 1995a: 22]「重ね焼き法」という方法がある。本稿が採用するのもこの方法である。本稿は、特攻隊員の手記の全体を一つの資料とみなし、すなわち文章の書き手、書かれた時期、宛先、目的を外し（横に置き）、社会学の生活史法の手法に則り、個々の文章の脈絡を尊重しつつ抽出し、分析し、解釈する。特攻隊員の体験の緊密性は、手記の同質性を規定し、こうした方法を可能とする。こうした手続きにより、読みえた範囲、解釈できた範囲でもなお、本稿に必要な限りの事実の調達と解釈は達成できると考える[2)]。これが本稿の前提である。

## Ⅲ 特攻隊概要

### 特攻作戦

特攻作戦とは、アジア太平洋戦争末期、兵器（飛行機や高速艇等）に爆弾・爆薬を積んで、敵艦・敵機に操縦者ごと体当りした戦法をいう。操縦者が生還する可能性は、皆無であった。しかしこの他、兵器を抱え、または兵器もろとも敵に突入した戦法に、斬り込み隊やバンザイ突撃等の決死隊があった。それらも、兵の生還の確率は小さかった。しかしそれらには、形式的にせよ、生還の配慮が施されていた。「『決死』は『死』を主観にゆだねている。また『決死隊』の背後にはつねに『救助』が用意されて」[草柳 1972: 2]いる。真珠湾攻撃の（水中から敵艦船に接近し、魚雷を発射する）特殊潜航艇も、攻撃後は母艦による収容を前提としていた。戦闘の中で、自らの判断で敵に突入した兵もいた。しかし特攻作戦は、それらと異なり、最初から必死が作戦目標とされていた。「『特攻』は『死』を客観にゆだねている。……『決死』はある局面にのみむけられるが、『特攻』はいわば『制度』として採用された、持続的な組織」[草柳 op.cit.]であった。

特攻には、航空攻撃（神風等）、人間爆弾（桜花、神雷）人間魚雷（回天）、爆弾ボート（甲標的、宸洋）、小型潜航艇（海竜）、海上挺身隊（マルレ）、戦車隊（丹羽）等があった。戦争末期の「全軍特攻化」への過程で、種々の特攻兵器が考案され、その一部が実践化された[3)]。では、特攻作戦の戦果はどうであったか。戦果に関する確定した数字はない。特攻にどの範囲を含めるか、どの資料に依るかにより、出撃回数や出撃機数、帰還機数、戦果の算定は異なる（その詳細は、本稿の範囲ではない）。たとえば航空特攻では、出撃総数は約 3,300 機、敵艦船への命中率 11.6%、至近突入 5.7%、命中 32 隻、損傷 368 隻という数字[服部 1995: 590]がある。出撃機数 2,483 機、奏功率 16.5%、被害敵艦数 358 隻という数字[生田 1977: 223]もある。特攻機の多くは、敵艦に突入する前に、対空砲火により撃墜された。敵艦への命中率は小さかった。しかし、特攻作戦が米兵に与えた衝撃は大きかった。自殺攻撃（suicide attack）の特攻は、必須の生還を前提とする戦闘観を抱く米兵を直撃した。特攻は「ゾッと身の毛がよだつような気味悪いもの」（米国人の著書）[生田 1977: 80]で、「短期決戦によって沖縄の勝利を獲得する望みは、もう今となっては雲散霧消してしまった」（同）[生田 1977: 186]。

### 特攻隊員

特攻による死者の数も、文献により一致しない。特攻の死者にどの範囲を含めるか、どの資料に依るかにより、死者数は異なる（その詳細も、本稿の範囲ではない）。たとえば4,379 人[北川 1967: 12]、3,915 人[わだつみ会 1995: 4]、3,848 人（特攻隊慰霊顕彰会編『特別攻撃隊』）[保阪 2005: 151]等の数字がある。特攻隊員は、海軍飛行予備士官・陸軍特別操縦見習士官（大学・高専出身の学徒で 1920～25 年生れ）、予科練（14～15 歳の少年に約 3 年の基礎教育を行った海軍飛行予科練習制度）出身下士官（少年飛行兵）、海軍兵学校出身士官、普通兵科出身者から成った。特攻隊員の 70%は学徒兵であった[保阪 1994: 151]。神風特攻隊では、769 人の 85%が学徒兵であった[福間 2007: 21]。

軍には、出撃前から生還の途を断つ特攻作戦に異議もあった。そうした残酷な作戦は、「皇軍」の名にもとるとして、特攻隊は、軍内の「殉国同士の集団」[生田 1977: 45]扱いされた。鈴木貫太郎首相は、「生還の見込みが全然無い用兵は厳正な意味では作戦とは言い難い。日本海軍の用兵不文律は九死に一生を得ることを限度として来た」と述べた[森本 2005: 196]。前掲の大西中将も、「特攻は統率の外道」と批判的であった[草柳 1972: 77-78]。通常攻撃の有効性を主張し、特攻隊の編制を拒否した部隊長もいた [4)]。しかし、米軍の圧倒的な軍事力を前に、軍上層部には、特攻作戦は起死回生の策かに思われた。大東亜圏（東南アジア）の生命線・フィリピン～台湾に侵攻する米軍を阻止し、続いて、本土防衛の前線・沖縄への米軍の上陸を阻止するには、特攻作戦しかないと思われた。実際に、特攻隊員作戦は米軍の侵攻を遅らせた。他方、特攻作戦は、敗色濃い戦局の中、本土決戦に備える国民の士気高揚に利用された。特攻隊員は、「一億玉砕」の尖兵であり、鑑（かがみ）であった [5)]。

こうした事情を考慮し、特攻隊員には特別の処遇が施された [6)]。一つ、特攻死した兵には、二階級特進が与えられた。それは名誉だけでなく、年金の増額による遺族の生活保障も意味した。生還者には優先的に再出撃が命じられたが、「二階級特進の申請のてまえ」[福間 2007: 24]が、理由（の一つ）であった。二つ、戦死者は、全軍布告で「英霊」として顕彰された。それは名誉だけでなく、全軍の士気高揚のためでもあった。特攻死はさらに、特攻隊員を輩出した郷党の栄誉であった。実家は軍神の家とされた [7)]。特攻死により、「忠孝一本」（忠義と孝行の合致）が達成された。「郷土始めての特攻隊で体当り、私の後に続く後輩を出して下さい。市長殿にもよろしく、区長さん並に隣組一同にもよろしく」[真継 1994: 47]。三つ、特攻隊員の選出は、志願の建前を取った（「熱望」「希望」「希望せず」。ただし兵学校出身者は指名であった） [8)] 。しかしそこには、2 つの問題があった。まず、兵士に必死の死を選択させることの無理であった。多くの兵が忠誠心に燃え、「心から」特攻を志願した（「心から」の真意を分析するのが、本稿の主題である）。しかしそうでない兵もいた。たとえば陸軍航空本部の調査（1945 年 5 月）で、次のような結果が出た。「隊員ニ編入セラレテ尚覚悟ノツカザル時ハ『ソノ場ニナリテ何トカ決心』セントシテ之ヲ遷延シ従ツテ直前ノ雰囲気ニ過度ニ敏感トナリ、精神ヲ左右セラレ却ツテ益々決心ヲナスニ甚大ノ努力ヲ要スルニ至ル、現在ノ隊員ニシテ此レニ属スルモノ約三分ノ一アリトスル観察ハ殆ンド正シキカ」（傍点―引用者）[生田 1977: 210][9)]。公式調査でこの結果である。死の覚悟に至らない特攻隊員は、さらに多かった（と思われる）。次に、志願を拒否することの困難であった。ある部隊で、特攻希望の有無を聞くために、予科練習生に封筒と小紙片が手渡された。ところが、「だれ一人として“希望”と書いた者もいなければさりとて“白紙”のままで出した者もいなかった。表現は異なれ、皆、判で押したように、『命令のまま』であった……どうしてどうして正直に本音を書こうものなら、後には陰湿な罰直（制裁）が待っているからなあ―、とても本音は書けないよ」[桑原 2006: 404][10)]。志願を拒否しても特攻隊員に編入される者もいた。志願希望の有無さえ問われなかった者もいた。「特攻隊員の募集が形式的にあったかどうか、はっきりしません。そうした行為は特になく、戦隊全体が特攻任務だったのでは」[渡辺 2007: 104]。人選は「長男、一人息子、妻帯者は除外」[渡辺 2007: 125]するとされたが、そのルールも容易に崩された。他方、「志願しなかった若者は『好ましからざる人物』とみなされ、特攻作戦と同様に死が確実視されていた南方戦線へ送られると考えていた」[大貫 2006: 12]。また出撃したが、飛行機の故障や天候不良、敵を発見できなかった等で、生還する兵は少なくなかった [11)]。しかし生還は恥辱であった。「昭和 20 年 4 月 12 日　一人帰ル身ノ辛サ、何トモ言エズ、恥カシクテナリマセンデシタ。

会ウ人ゴトニ声ヲカケラレルノガ、身ヲ切ラレルヨウ、マシテ一番機ノコトユエニ一層デアリマス」[海軍飛行 1995: 141]。「卑怯者呼ばわりされた一人の特攻隊員が、『ようし、明日は敵艦が見えなくとも突っ込んでやる……』と泣きながらわめいていた」[毎日新聞社 1979: 157]。

**特異な死**

特攻は、「出撃前、自ら生還の念を断つことによって、その精神力、戦技力、そして使用する飛行機も敵艦撃沈の一点に集中できる」[生田 1977: 28]。だからこそ、敵機の追撃や敵艦の対空砲火をかわして、敵艦に突入できる。その達成の成否は、「実にこの己れを滅する精神力にかかって」[生田 1977: 34]いる。これが（軍側の）特攻作戦の企図であった。そしてここに、特攻死の特異性があった。まず、特攻死は「約束された死」であった。特攻隊員は、出撃前に、必死の死を覚悟することができた（しなければならなかった）。また、特攻死は「構築された死」であった。特攻死は「無私の死」であり、特攻隊員は救国の「軍神」である。こうした特攻隊表象が国民を捉えていた。「特攻隊員という表象は宗教的儀礼（皇国護持の人柱―引用者）におけるような集合表象としての意味を」[中村 2006: 310]もっていた。それは特攻隊員も捉えていた（それに違和感をもつ特攻隊員もいたが[12)]）。その分それは、彼らの死に様を縛る拘束となった。さらに、特攻死は「計算された死」であった。特攻死は家族の栄誉であり、年金は親孝行であった[大貫 2003: 266][13)]。これらはいずれも、戦死全般がもつ特徴でもあった。特攻死はその究極であった。こうして特攻隊員は聖視された。若者たちは特攻隊員を志願した（強制された）。その時彼らは、死の恐怖とは別に、特攻で死ぬことの意義を悟っていた。戦争の時代、青年男子のだれも徴兵を免れず、軍隊を免れず、戦闘を免れず、（おそらく）死を免れなかった。そして彼らは、「どうせ死ぬなら」と思った。ある者は、きっぱり死にたいと思った。特攻死に道具的な死をみた。ある者は、英雄として死にたいと思った。特攻死に散華の美をみた。ある者は、親孝行したいと思った。特攻死に「忠孝一本」をみた。

こうした特攻死論の対極に犬死論がある。犬死論は、特攻作戦の批判としてある。しかし「犬死」の語は多義的である。1)特攻は戦局の（戦勝への）転換に至らなかった、ゆえに特攻死は無駄な死であったという考え[14)]。そこでは、特攻作戦の無謀が批判される。2)特攻隊員は、兵器と化したという考え。そこでは、死の恐怖さえ抑圧した、特攻隊員の自己疎外が強調される。3)特攻隊員の死は、歴史的に無意味であったという考え。これは礎（いしずえ）論（「特攻隊員は戦後の平和の礎だ」）への批判としてある。こうした犬死論に対して、「特攻隊員としての戦没学生のなかにこめられている苦悩や懊悩を理解していない。特攻隊員の悲しみや苦しみを足蹴にして得意になっている非人間的捉え方」[保阪 2005: 22]という批判がある。これは、2)の犬死論への批判である。特攻隊員は、最後まで死に苦悶した。ゆえにこの批判は正しい。しかしそれは、1)3)の犬死論への批判とはならない。では 1)の犬死論はどうか。特攻は戦局の転換に至らなかった。しかし、敵艦の侵攻や沖縄への上陸を遅らせた。その限りで特攻は効果があった。ゆえに特攻は無駄ではなかった。戦局の転換という大局からみれば、それができなかった作戦は、すべて犬死ということになる（ここでは「無駄」の意味を問うている。特攻作戦の擁護とは関係ない）[15)]。さらに 3)の犬死論はどうか。後代の我々が特攻隊員の死に何を読むかは、歴史観次第である。特攻隊員の死に意味があったか否か、「平和の礎」をどう理解するかは、価値の問題である。たとえばある遺族会は、「歴史的な無意味」論を次のように批判している。「名誉の戦死もあり、憤怒の刑死もある、いずれも後世に

おいてその死を犬死という名で呼ぶことはできぬ。死においてはすべてが同じく、尊厳の死として語りつづける。彼らは同じように生き惜しみながら死んだことによって、われわれに非戦の意志を託したといわざるをえない。尊厳はわれらが非戦をどのようにうけつぐかの一点にかかっている」[白鷗遺族会 1992: 349]。

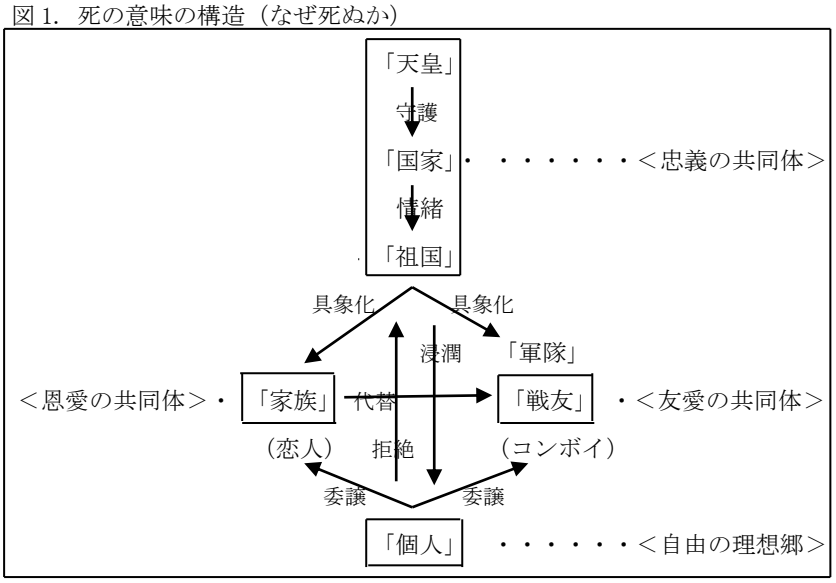
## Ⅳ 死の意味

### 枠組の構成

特攻隊員は死をどう受け入れたのか。特攻隊論の最大の論点はここにある。これまで、多様な言説が紡がれてきた。しかしその多くは、論者の心情の表明を出るものでなかった。特攻隊員の死の意味を、彼ら自身の目線で、分析者にとり不都合な事実を含めて、どう分析するのか。そのために分析者は、まず、自らの心情を括弧に括り、特攻隊員の世界に沈潜しなければならない。次に、そうして浮き出た諸事実をどう解釈するのか。ここで解釈者の視点が現れる。そして解釈枠組が必要となる。手記自体に、意味を語らせることはできない[16]。ならば、こうした手記解釈の手法に則った、筆者自身の視点と枠組は何か。これが次の問題である。

森岡は、学徒兵を「現行の習俗化した社会規範にしたがって役割を把握し、その遂行に倫理的満足を見出す習俗的役割人間」と「自らの状況規定により役割を取得して、その遂行に倫理的満足を見出す主体的役割人間」[森岡 1995a: 205]に類型化した。保阪は、特攻隊員を「時代が与えた枠（国家に殉じる―引用者）の中に入って、それが歴史の上ではある証明になるだろうと考えた」人、すなわち時代から歴史へ上昇した人と、「歴史の流れに身を置いて、その姿を時代の中に刻印をしようとした」人、すなわち歴史から時代へ下降した人[保阪 2005: 95-96]に類型化した。福間は、特攻隊員の「殉国」型と「犬死」型を対極に置いた[福間 2007: 13]。ここで犬死とは、「戦争体験への虚飾を排して体験そのものを直視し、そこから戦争の暴力を捉え返そうとする」[福間 op.cit.]立場を指す。筆者は、特攻隊員の手記を読み、これらの類型論を参照し、かつ筆者の前論文[青木 2008: 83]の枠組を修正して、特攻隊員の死の意味を 4 つに類型化した[17]。次いで、それらを対抗的な「殉国」型と「投企」型に集約した。図 1 を見られたい。

図 1. 死の意味の構造（なぜ死ぬか）




**死の意味** [18)]

まず特攻隊員は、＜忠義の共同体＞に死の意味を求めた。忠義の共同体は、「天皇」「国家」「祖国」から構成された。「天皇」は「国家」の庇護者（親）であり、兵はその臣民（子）であった。「国家」は「祖国」を守る主体であり、「祖国」は「国家」の情緒的表象であった。戦争に負ければ、敵の侵略を許す。そうなれば、愛する縁者が住む祖国が喪われる。美しく優しい故郷が蹂躙される。だから祖国を守られなければならない。そのために、国家の庇護者・天皇の命に服して、国家を守らなければならない。こう考えて、特攻隊員は、「天皇陛下万歳」と叫んで敵艦に突入した。「天皇陛下万歳」は「祖国万歳」であった。「彼らは、天皇ということばに“全日本人”の意味を託し、神州ということばに“故郷”を象徴させていた」[北川 1967: 3][19)]。

「祖国」は、2 つの方向で＜具象化＞された。まず、＜恩愛の共同体＞であった。その中心には「家族」（家族同然の「恋人」）がいた。家族には最愛の人々がいる。家族は私を育み、私の魂が帰る場所である。戦争に負ければ家族が辛い目にあう。だから私は、家族を守らなければならない。私が卑怯者になれば、家族が辛い目にあう（家族は国家に人質にとられている）[20)]。だから私は、逃げるわけにはいかない。特攻隊員はこう思った。ある者は、祖国と家族のために戦う、だから天皇と国家のために戦うと思った。そして「天皇陛下万歳」と叫んで敵艦に突入した。ある者は、天皇や国家のためではない、ただただ家族のために戦うと思った。そして「お母さん」と叫んで突入した[21)]。

「祖国」は、次に、＜友愛の共同体＞へ具象化された。そこには「戦友」がいた。特攻隊員にとって、戦友は死の苦悶を見届け、死の実践をともにする「コンボイ」（死の道連れ）[森岡 1995a: 28]であった。「一人で死ぬより一緒に死にたい。孤独の死を分かちあえば死の恐怖もまた半減する」[森本 2005: 332]。また軍隊は、「死生活楽ヲ共ニスル軍人ノ家庭」（軍隊内務令第三条）[森岡 1995a: 28]であった。また軍隊は、＜恩愛の共同体＞から隔絶された孤独な空間であった。それが戦友との運命感を強めた。他方、軍隊は厳格な階級社会であった。特攻隊員は、上官（航空隊幹部や兵学校出身者）に（暴力的に）軍人精神を注入された。暴力は上官への反感を生んだ。「諸君だけをけっして見殺しにしない。我々も必ず征く」と言い、結局出撃しない上官を、特攻隊員は軽蔑した。「おえら方に特攻の何

たるかがわかってたまるか。特攻請負の特攻知らずめ」[桑原 2006: 101]。出撃して、「わざと基地の司令部の建物に当らんとばかりに低空飛行してから、飛び去って行く者もいた」[大貫 2006: 16]。こうした上官への反感が戦友との絆を強めた。「私は祖国のために、我が十三期の仲間のために、更に先輩の学徒出身の戦士のために、最後には私のプライドのために生きそして死ぬのである。帝国海軍――その意味するところは江田島出身のある部分の仕官によって代表される――を呪いながら」[日本戦没 1995: 392]。

死の意味を自己の内面に問う特攻隊員もいた。彼らは近代死の探求者であった。「真実に死をみつめよ。死をみつむる目のより深かれ。刹那主義は死をみつむることにおいて、ある垣を乗り越えている。しかし死をみつむる目の中でもっとも浅きものである」[日本戦没 2003: 334]。彼らは、死は生の解であると思った。ゆえに、死の意味（「なぜ死ぬか」）を生の意味（「どう生きたか」）に遡って問うた。次に、死は生の延長であった。彼らは、死後の世界に＜自由の理想郷＞を求めた。彼らは、そこで解放される自分を見た。彼らは、＜自由の理想郷＞に立ち、＜忠義の共同体＞を＜拒絶＞した。＜恩愛の共同体＞や＜友愛の共同体＞も、死の意味の究極解にはならなかった。彼らにとって、＜恩愛の共同体＞や＜友愛の共同体＞は、＜自由の理想郷＞に至る道程であった。彼らは、家族や戦友との絆に癒しを求めた。その時、自由が一時的にそれらへ＜委譲＞された。

これらは、特攻隊員の死の意味を解釈する（一つの）理念図式でしかない。どの特攻隊員も、これらの理念を、多かれ少なかれ、合わせもっていた。そして、これらの理念の間を往来した。その往来の過程こそ、死の意味の模索過程であった。最初からどれかの理念に純化した特攻隊員はいない。最初から＜忠義の共同体＞を信じた特攻隊員はいない。彼らも、皇国主義者になった人々である。多くの特攻隊員は、＜恩愛の共同体＞から出発した。そこから＜忠義の共同体＞に上昇した。次いで、その一部は＜忠義の共同体＞に絶望し、またはその代替として＜友愛の共同体＞に下降した。他方、別の特攻隊員は＜自由の理想郷＞を求めた。国家対自由。＜自由の理想郷＞は、＜忠義の共同体＞の対極にあった。しかし、＜自由の理想郷＞の希求にも動揺があった[22)]。一方で、＜自由の理想郷＞へ＜忠義の共同体＞が＜浸潤＞した[23)]。「東洋で唯一の強国である日本の使命は、アジアを西洋の植民地支配から解放することである」[大貫 2004: 338]。他方でそれは、＜恩愛の共同体＞と＜友愛の共同体＞に委譲された。＜自由の理想郷＞を求める特攻隊員も、最後は死の孤独を癒す避難所を求めた。その時、家族と戦友の力は大きかった。こうして、敵艦に突入する直前、彼らが特攻機から発した無電は、「祖国の悠久を信ず」「われ、敵艦に突入す」と「お母さん、サヨナラ」「日本海軍のバカヤロ」[草柳 1972: 41-42]であった。

**殉国**

祖国あっての家族、国家あっての軍隊。＜恩愛の共同体＞と＜友愛の共同体＞は、結局、＜忠義の共同体＞に包摂される。それらは一つの論理の中にある。＜自由の理想郷＞も、それらの共同体と完全に無縁ではない（委譲と浸潤）。しかし死の意味を、天皇に収斂させる論理と個人から導出する論理は、根源的に相容れない。こうして、4 つの死の意味は、結局、＜忠義の共同体＞と＜自由の理想郷＞に集約される。ここで、＜忠義の共同体＞を求めた死を＜殉国＞、＜自由の理想郷＞を求めた死を＜投企＞と呼ぶ。特攻隊員は、たがいに正反対の死の道を歩んだ。

特攻隊員は、「皇国護持」を念じ、「天皇陛下万歳」と叫んで死んだ。そこに躊躇はなかった。では彼らは、なぜそのように死ねたのか。ある者は、「醜敵」から国家・祖国・故郷・家族を守るのだと思った。ある者は、アジアを植民地から解放するのだと思った。ある者は、先立った戦友に続くのだと思った。ある者は、家族に栄誉を授けたいと思った。ある者は、時代が求める役割に徹し、男子の本懐を遂げたいと思った。こうして彼らは、死を「積極的に」受容した。特攻隊員が死ねば英雄になり、軍神になる。こうした時局の特攻隊表象を彼らも抱いていた。ゆえに彼らには誇りがあった。「国を救うのは俺たちだ」。「祖国、邦家、母国、君国、神州、等々のために自分は死ぬのだと考え、それが彼らの心をささえ、彼らの心のさまざまな乱れや苦しみを強引に割りきらせる内側からの根拠であった」[小田切 1970: 314]。それは、「社会的な良心の一つのあらわれ」[小田切 op.cit.]であった。特攻隊員の手記に、殉国の美を綴った文章が多い。それが彼らの「本音」であれば、彼らは殉国を実践したことになる。そこに、彼らの本音（生の執着と死の恐怖）の抑圧があれば、その分、彼らは殉国から遠ざかったことになる。しかし「本音」と本音の境界は明確でない。ある者は、家族を心配させまいと、本音を抑えて型通りの文章を書いた。ある者は、不可避な死を前に、そう書くしかないと思った。ある者は、本音に拘るのは潔い死の妨げになると思った。しかし彼らはすべて、本音を抑えて（でも）忠義の文章を綴ることができた。それは、検閲ゆえの文章の加工を越えた、本音の強さ（弱さ）の問題であった。彼らは、どうしても「書いて伝えておかねばならぬというほどの、内的な要求の切実を自覚することも」[小田切 1970: 313]なかった。その分、逆に、彼らの死は殉国に近づいた。

**投企**

投企（project）とは、「未来にむかつてみずからを投げる」[Sartre1946=1955: 20]、すなわち、人間が現状況を引き受け（自らを抵当に入れ）、未来の不確実な状況に自己を賭け（自己を投じ）、もって自由を先取する、そのような人間の意識（実存）をいう。特攻隊員には、自由主義者（とマルクス主義者）がいた。「唯一つの理想――それは自由である」[白鷗遺族会 1992: 84]。「私は明確に云えば、自由主義に憧れていました。日本が真に永久に続くためには自由主義が必要であると思ったからです。これは、馬鹿な事に聞こえるかも知れません。それは現在、日本が全体主義的な気分に包まれているからです。しかし、真に大きな眼を開き、人間の本性を考えた時、自由主義こそ合理的なる主義だと思います」[日本戦没 1995: 375-376]。彼らは時代に絶望していた。「死ぬまでに俺の心はどこまで荒んで行くことか」[日本戦没 1995: 282]。政府や軍隊、戦争を批判していた。「今次の戦争には、もはや正義云々の問題はなく、ただただ民族間の憎悪の爆発あるのみだ」[日本戦没 1995: 283]。＜個＞から死の意味を問うた彼らは、死を強いる時代と衝突した。「出撃前夜、個と全との矛盾は我が心情中に解決し得たとは言い得ず。靖国神社の奥殿にさぞや恥ずかしからむ」[日本戦没 2003: 339]。そして彼らは、こうした時代を越え、自由の新生日本を創る、そのための捨石になると思った。「悠久の大儀に生きるとか、そんなことはどうでも良い。あくまで日本を愛する。祖国のために独立自由のために闘うのだ。……死はその道程にすぎない」[日本戦没 1995: 374]。全体主義は自由主義に勝てない。「戦争において勝敗を見んとすれば、その国の主義を見れば、事前に於て判明すると思います。人間の本性に合った自然な主義を持った国の勝戦は、火を見るより明らかであると思います」[日本戦没 1995: 376]。「フェニックスのように灰の中から立ち上る新しいもの、我々は今それを求めている」[日本戦没 1995: 192]。

ゆえに私は、その主義の一翼を担って死ぬ。こうした死の選択を、ここで投企と呼ぶ。自由主義者は、未来に自己を投企することで、死ぬことができた。それでこそ彼らは、自らの思想と不条理な死の矛盾を解決（止揚）することができた[24)]。「日本は大きな理想を実現する苦しみに悶えている。苦悩なしに光明は掴み得ない」[日本戦没 1995: 354]。自由日本でこそ、＜個＞と＜祖国＞は合一する。その先鋒を務める特攻隊員に任ぜられたことを誇りに思う。「栄光ある祖国日本の代表的攻撃隊ともいうべき陸軍特別攻撃隊に選ばれ、身の光栄過ぐるものなきを痛感致しております」[日本戦没 1995: 17]。こう思って、特攻隊員は死を受け入れた。「明日は自由主義者が一人この世を去って行きます。彼の後姿は淋しいですが、心中満足で一杯です」[日本戦没 1995: 19]。

**殉国と投企**

「皇国護持」を信じて散華した特攻隊員と、自由日本の到来を信じて投企した特攻隊員。彼らの思想は、交錯することはなかった。ゆえに死の意味も、重なることはなかった。しかし同時に、そうではなかった。「『殉国』と『戦争責任』は二項対立であったわけではなく、両者は連続線上に位置づけられていた」[福間 2007: 205]。ここで「戦争責任」とは、自由主義者の戦争批判を指す（ものとする）。皇国主義者と自由主義者は、交錯しあった。まず両者は、国家の命運を憂えていた。自由主義者も書いた。「私は国のいのち、というものをここで、深く考えさせられる。我々の国家への情熱の強さというものは、今さらに、慄然とさせられるほどだ」[日本戦没 2003: 345]。ただし、両者において国家の意味は異なった。皇国主義者は、国を守護することに命を捧げた。自由主義者は、国を再生することに命を賭けた。次に、皇国主義者も自由主義者も、祖国と家族を愛した。いずれも、祖国と家族の至福のために戦うと思った。自由主義者も書いた。「俺たちの苦しみと死とが、俺たちの父や母や弟妹たち、愛する人たちの幸福のために、たとえわずかでも役立つものならば」[日本戦没 1995: 283]。ただし、祖国と家族の至福を実現する国家は、両者の間で異なった。次に、彼らの死は悲壮で悲痛であった。特攻隊員は、「英霊でもなければ犬死でもない。その死には怨嗟があり、悲しみの視線があった」[保阪 2005: 57]。「千葉兵曹は写真を胸に置いたまま眠っています。写真をよく見ると、お母様の写真でした。私はその時、泣けて泣けて仕方がありませんでした」[北川 1967: 241]。特攻隊員の勇壮な言葉のすぐ後に、こうした心情があった。「過日戦友に依頼し、小額の金銭と時計をお送り致しました故、御受領下さい。一　私事なし　一　女事無し　一　借用金無し」[北川 1967: 110]。特攻隊員は、家族の健康を案じ、弟妹の教育を配慮し、死後に諍(いさか)いが起きないよう心を配り、借金や女性関係、家系のことまで書いた[真継 1994: 236]。「小生の金銭が少しでもありましたら、また葬儀は出来るだけ簡単にしてください。（まだ大東亜戦の真只中で御座いますから）。そしてこれらの金銭は国民学校を主とし、公共事業の事にお当て下さい」[辺見 2002: 172]。最後に、自由主義者の思想に皇国主義が浸潤していた。自由主義者は軍国主義を批判した（近代化の要請）。他方で彼らは、欧米の資本主義を批判した（近代の超克）。彼らは、日本を資本主義の毒牙から守り、一視同仁の共同体に昇華すべしと思った。欧米資本主義の批判は、植民地主義批判に連続した。彼らは、日本にアジア諸国の植民地解放の使命があると思った。そして大東亜共栄圏構想に賛同した。「アジア解放」は、彼らの戦争受容の跳躍板となった。こうして自由主義者（の一部）は、皇国主義者と手を携え、敵艦に突入していった。

## Ⅴ 死の実践

### 気概と苦悶

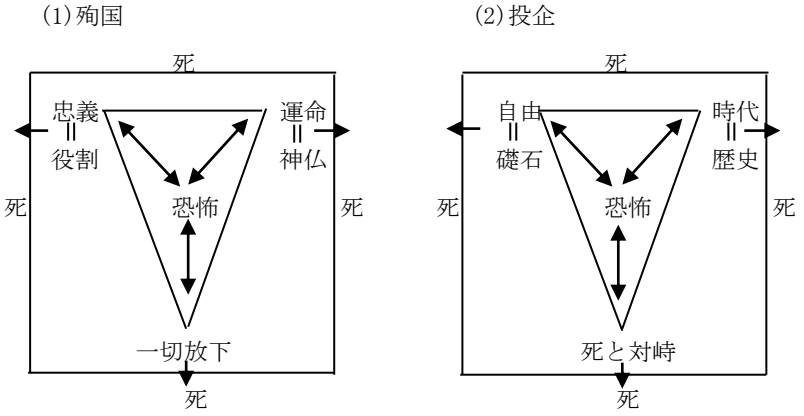
特攻隊員は、救国の士として誇りと気概をもった。「現今の戦局を打開し得るものは、日本広しといえども、またその壮丁いかに多しといえども、ただ陸空、神風、神潮の三特攻部隊あるのみなり」[日本戦没 2003: 375]。それは、彼らを軍神と崇める世間の眼差しを内化した姿でもあった。「結局のところ、従順に死を受けいれるほかはないような社会的強制とそれの美化に追いたてられて、彼らは死に向かって踏み出していった」[小田切 1970: 314]。特攻隊員は、同時に、不可避の死を前に、死の恐怖に苦悶した。人生の悔恨、別離、孤独、悲嘆、不安、恐怖。「あきらめきれない砂時計の針がまわってゆく。……あと一月の生命に、何の装飾もない私を見つけだそうとの私のあがき。私には、もう自分自身でなくなってしまっているようだ。……よくもかくまで生きながらえたものと　よそびとは泣くかも知れぬような私の毎日」[日本戦没 1995: 384-385]。彼らは絶望し、意気消沈した。「飛行場では、特攻隊と制空隊の二つの訓練が行われるが、一目みただけで特攻隊がどちらかがわかる。制空隊は溌剌として元気いっぱいだが、特攻隊は沈滞して士気が上らない。特攻隊に指名される前は鬼分隊士だった者も、特攻隊員になると仏に変身してしまう。いっしょに突入する部下を殴ることができなくなる」[わだつみ会 1993: 125-126][25)]。とりわけ一日刻みの出撃延期は地獄であった。「二週間に及ぶ出撃待機は、人間の精神力の限界であったかもしれない。今日は死ぬか、明日は駄目か、毎日、死との対決だった。正直なところ参ってしまう。最後に生きていることが苦しくなり、どうでもよいから早く突っ込んで、ひと思いに死んでしまいたいと考えるようになった。死刑囚もこんなだろうか……、と思ったりした」[毎日新聞社 1979: 255]。

### 特攻死像

出撃直前の特攻隊員について、対照的な言説がある。一つ、特攻隊員は、颯爽（さっそう）と死地に赴いたというものである。「彼らは偉いものだったよ。『二、三時間後には死が決まっている』とはどうしても思われない明るさ、平静さ、全く頭の下がる態度だった。いよいよ出動の飛行機に乗り込む時には『色々お世話になりました。私どもは先にまいります。日本の後を頼みます』とニッコリ笑って飛び立って行ったのだよ。中にはロープを取り出して『体が飛び出さないように、機体にしっかりと結びつけてくれ』と世話する整備員に頼んでいた戦士もいたよ。見送る者は皆、感動のあまり涙をこらえることが出来なかったものだ」（通信兵）[生田 1977: 245]。二つ、特攻隊員は、最後まで死の恐怖に慄（おのの）いたというものである。「（鹿屋特攻基地の）野里小学校の仮宿舎の中で、出撃の順番を待つ同期の搭乗員たちの、ひきつった蒼白な顔を、私は今でも、一人一人克明に思い出すことが出来る。すでに、拒否することも許されず、脱走することも出来ない。特攻隊員の宿舎は、一言でたとえれば、屠殺を待つ牛の群れであり、生き地獄だったと評しても過言ではなかった」（戦時記者）[毎日新聞社 1979: 190]。いずれも特攻隊員の傍らにいた人の証言だけに、かえって迫力がある。特攻隊員の出撃「前夜」の死に慄く姿と出撃「当日」の颯爽とした姿。しかしそれらは、別々の特攻隊員の姿ではなかった。特攻隊員はだれも、死に臨む気概と苦悶を、強烈に合わせもっていた。森本は、これを昼の顔と夜の顔に対照させて描いた[森本 2005: 199-203]。「角田がそこに見たものは余りにも名状し難い搭乗員たちの姿であった。これが、自分があの昼間に見た特攻隊員と同じ人間たちなのか。鬼哭啾々として迫り聞こえる光景。今朝、角田と一緒

に出撃して征った搭乗員たちは『皆明るく喜び勇んでいた様に見えていたが』……」[森本 2005: 202]。隊員たちは夜が恐かった。平静に死に臨む。それが可能なのは、死の苦悶を超克できたからである。苦悶から平静へ。この過程を分析すること、これが次の課題である。特攻隊員の死の実践（どう死んだか）は、死の意味（なぜ死んだか）に直結する。ゆえに死の実践の分析は、死の意味に即して行われる。図 2 を見られたい。

図 2. 死の実践の過程




**殉国の過程**

殉国の特攻隊員も死に苦悶した。ある者は、ひたすら忠義を念じて死に臨んだ。「今醜敵沖縄に迫る。断乎撃滅するのみ。我死すとも必ずや魂魄鬼神と化して醜敵を殲滅せん、切に望み且祈る、我愛する人々の皆様天寿を全うして有難聖代を寿がんことを。日本の将来益々洋々たるものあるを確信す。現時の艱難は単なる一試練のみ、やがて富士の霊峯桜花と共に輝かん」[小田切 1970: 50-51]。そこに忠義に徹して死ぬことの美を見出した。「只今出撃致します。想い残るもの一つもなし。私ごときものの死生、問題とするに足らず。我、任務さえ全うすることできれば本懐なり。神州絶対不滅」[北川 1967: 94]。ある者は、運命に自らを委ねた。「人の運命は解らず、人の命は朝露の如しとか。疊上にて一夜の中に不帰の客となれる者あり。それに比ぶれば吾が計画的に死所を選び、死所を得たるを喜ぶ」[真継 1994: 154]。また、自らの運命を仏に委ねる者もいた。「全ては日々好日、南無阿弥陀仏の一語に尽きているのだ。……この仏こそ全てを摂取し給いてある不捨の慈仏であるのだ。南無阿弥陀仏」[小田切 1970: 35]。「生きて帰れば父母の國、死んで帰れば仏の國、いずれに帰るも親の里」[小田切 1970: 57]。ある者は、生の執着と死の恐怖を精神の一遇に隔離し、一切放下（一切の執着を捨て去れ）と思考を切断した。「大君の詔勅のまにまに戦争をやるということは、『一切放下』があってはじめてできる」[星野 1966: 43]ことであった。「俺の心には生もなければ死もない。ただあるは空の一字、死生観というは生に、また死に拘泥するから起る。ただあるは空の一字。死生観というは生に、また死に拘泥するから起るものである」[真継 1994: 64]。そして彼らは、武士道に死の美学（『葉隠』の「武士道といふは、死ぬ事と見付けたり」）を求めた。しかしそれは簡単なことではなかった。「彼らは死生一如（生きて死に、死んで生きるという、生死合一の精神状態―引用者）の心境になり切ろうとしてふだんの生活の中で、修業し努力していたが、若い彼らにそれを望むことは無理であった。葉隠論語によみふけったり、武士道論を

語って死を怖れぬ心境に達しようと苦悩している者もいた」[毎日新聞社 1979: 157]。その時、死の意味は彼らの脳裏から消えていた。「悲劇は、苦しいとうめ声をあげることだけにあるのではなく、自ら思考を切断して苦しみもしなくなることにこそあったのだ」[星野 1966: 44]。

特攻隊員は、死の恐怖から出発し、恐怖と「忠義」「運命」「一切放下」の間を往復した（図中の矢印）。そして死んでいった。それらすべてを往復した特攻隊員も、いたかもしれない。その一つひとつの過程こそ、生（の執着）と死（の恐怖）の間を揺れる苦悶の姿であった。過程の長短は、一人ひとり異なった。しかし特攻隊員は、忠義を念じ、運命に身を委ね、思考を切断して、または、そのどれでもないかたちで（死の覚悟の時間切れで）、それぞれの死の実践を終えていった。「是迄にいかなる心の灯のゆらめきがあったかはもう問題じゃない、私は今こんなにも澄み切った心で人間の本当の道を歩むことが淡々と出来、本当に今は死は些(いさ)かの恐怖でも問題でもなく爽快な生命の充溢あるのみである」[小田切 1970: 35]。

**投企の過程**

日本の未来に自らを投企した特攻隊員も、死に苦悶した。「特攻隊員に命名されて體當りするまでの氣持なんていふものはとても筆などにては眞を寫し切れるものではない。この心境はかゝる經験を有するもののみが味はひ得るものとして書くことはやめよう」[東大戰歿 1947: 175]。ある者は、自由日本の到来のために死のうと思った。「この上はただ、日本の自由、独立のため、喜んで、命を捧げます」[日本戦没 1995: 376]。ある者は、時代の転換期にいることを幸福だと思った。「近頃僕は実際幸福だと思う。良き時代に廻り合ったと思う。正に大いなる歴史の最尖端にいるの感を深くし、大いなる光栄を担っている気持だ」[日本戦没 1995: 356]。そして、時代の捨石になろうと思った。「我々は消耗品に過ぎない。波の如く寄せ来る敵の物質の前に、単なる防波堤の一塊の石となるのだ。然しそれは大きな世界を内に築くための重要なる礎石だ。我々は喜んで死のう。新らしい世界を築くために第一に死に赴くものは、インテリゲンツィアの誇りであらねばならない」[白鷗遺族会 1992: 169]。ある者は、すべてを「棚上げ」して「死と対峙」した。「回天に搭乗して、本艦を離脱せば、はやそこには、大海中なる自己一個の世界のみ。そは、自爆装置の把手に、手をかくるも、かけぬも、ただ自己一個の気安き判断なり、と考うるに、何のさまたげなき世界なり」[日本戦没 2003: 374]。その時、彼らの脳裏から戦争が消えていた。

特攻隊員は、死の恐怖から出発し、恐怖と「自由」「時代」「死と対峙」の間を往復した（図中の矢印）。そして死んでいった。「自由」「時代」「死と対峙」のすべてを往復した特攻隊員も、いたかもしれない。その一つひとつの過程こそ、生（の執着）と死（の恐怖）の間を揺れる苦悶の姿であった。過程の長短は、一人ひとり異なる（投企の過程は、全体に、時代の支配的規範に準拠した殉国の過程より長かったかもしれない）。しかし特攻隊員は、自由を信じ、歴史を引き受け、死と対峙して、または、そのどれでもないかたちで（死の覚悟の時間切れで）、それぞれの死の実践を終えていった。

**同型の死**

こうして特攻隊員は死んでいった。殉国の死と投企の死。両者は、死の意味も、自己を委ねる対象も死の恐怖の「消去」の仕方もたがいに異なる。しかし他面で、彼らの死はたがいに近くにあった。まず彼らは、同じ死の苦悶を体験した。苦悶の原因は 3 つあった。一つ、生の執着が容易に断ちがたかった。二つ、死

の恐怖が容易に払拭できなかった。三つ、死の意味と方向が容易に定められなかった。次に、両者の死の過程は同型であった。特攻隊員は、死の恐怖から出発し、信念（忠義／自由）、超越的な力（運命／時代）、思考の切断（一切放下／死と対峙）の一つまたは複数の過程を往復した。どれかに自己を納めることができた特攻隊員は、「ニッコリ笑って」機に搭乗し、颯爽と手を振った。「（出撃命令に）それ！！　待っていたと許り思わず弾む唄と冗談の中に整理は迅速に終る」[小田切 1970：27]。「昭和20年4月19日　午後三時マデ待チマシタガ雨ノタメ出撃ハ明朝○七○○トナリ更リマシタ。今日一日戦友タチト、楽シク歌イ、語リ合ウコトガ出来マス」[海軍飛行 1995：120]。どこにも自己を納めることができなかった特攻隊員は、死の恐怖を抱えたまま、苦痛の表情で機に搭乗した。「軍刀を握り締めた機長を同僚と二人で、爆撃装置を取り払った機首へ押し上げた。重い。手に力が入らない、重い。この重さは、園田中尉と我々の心の重さなのか」[保阪 2005：69]。「特攻隊員が搭乗時に失禁する、腰が抜けて立たなくなる、失神してしまう。それを整備兵たちは抱き起こして無理に操縦席に乗せ飛び立たせた……ひどいことです」[保阪 2005：228]。出撃して「敵艦を見つけてもそこには突入せず、近くの水面に着陸しようとする者も」[大貫 2006：16]いた。苦悶のあまり、逆に、「迫り来る死の恐怖に耐えることが出来ず、その苦悩から一日も早く解放されたいがために、最後の瞬間が早く来ることを祈る若者さえいた」[大貫 2006：13]。死を超克するには強い精神力が必要であった。平安への障壁は高かった。「死は決して難しくはない。ただ死までの過程をどうして過すかはむずかしい。これは実に精神力の強弱において、ま白くもなれば汚れもする。死まで汚れないままでありたい」[北川 1967：151]。最後に、皇国主義者と自由主義者の来世像も同じであった。彼らは、死生一如を信じていた。彼らは、死ねば再生し、家族の元に帰ると信じていた。「玉男は死んだのではありません。姿は皆様の御前におらずとも、必ず皆様の許におり、楽しき我家をなき父、靖国の兄と共に見守っております」[真継 1994：188]。こうした死の過程の同型性ゆえに、殉国の死と投企の死は、たがいに遠くない距離にあった。「『わだつみ』と本書は……万里の長城で隔てられているわけではない」（「わだつみ」とは、自由主義者の手記を多く収めた書を指す。「本書」とは、皇国主義者の手記を多く収めた書を指す）[小田切 1970：312.]。

## Ⅵ 体験の継承

本稿は、特攻隊員の死を焦点に、死の意味の構造、死の実践の過程（の輪郭）を描いた。そして、特攻隊員の死を類型化し、それを殉国の死と投企の死に集約し、両者を対照させた。そこで、殉国の死と投企の死が正反対の方向を辿りつつ、同時に、たがいに遠くない距離にあることを示した。特攻隊員の死は、客観的（特攻死の状況）・主観的に（特攻隊員の意識）特異な状況にあった。ゆえにその分析を以て、戦没兵士全般の死の分析に一般化することはできない。また本稿は、「死の多様性と類型性」という特定の観点からする、特攻隊員の死の分析である。参照できた資料も限られている。本稿は、一つの仮説を提示したに止まる。しかしそれでも、特攻隊員の目線に沿って（そう努力して）彼ら自身の死を解釈することの意義は、確認される。特攻隊員の体験の継承は、そうした手続きに基づく分析を蓄積してこそ可能となる。信条や情念（のみ）によっては、戦争体験のたしかな継承は叶わない。まずは体験の諸事実を収集し、整理し、配列すること。次に、それをテキストとし、当事者の言葉で彼ら自身の体験を描くこと。これらができてはじめて、戦争体験の実像が浮き彫りになる。本稿はその試みであった（筆者の

「戦争社会学研究 2」）。戦争社会学研究の課題は続く。手記分析の生活史法を武器に、次の課題に向いたい。その中で、特攻隊員の意味世界に幾度もたち還ることになる。その度に、本稿の仮説が更新されることになる。

**[注]**

1） 最初の体当り攻撃は、1941 年 12 月 8 日のハワイ真珠湾攻撃で行われた。また、特攻の定義も種々ある。しかし特攻作戦とは、一般にこの時以降のものを指す。

2） いかなる特攻隊員像が描かれてきたか。それは、戦後いかなる特攻隊員像が求められたかに規定される[福間 2007: 11]。本稿は、特定の分析枠組に基づき（これ自体が選択である）、既存の特攻隊員像を一旦解体して、再構成するものである。

3） 中には「絶対にぶつかるしか方法のない飛行機」として、「いったん離陸したら、二度と着陸できないような信管」「離陸してから機内の綱を引くと、両車輪が落ちて、二度と着陸できぬ仕掛け」[草柳 1972: 76-77]まで考案された。1945 年 4 月 1 日には、海軍航空隊をすべて特攻化するという申し合わせがなされた[森本 2005: 247]。

4） 草柳は、「『特攻』のような行為は、ある種の特有の精神状況の所産ではなく、組織なり集団の中で『列内』にいるものが、みずからの位置の思想的検討を停滞させたときに起るのではないかと思う」[草柳 1994: 262]と批判する。

5） 特攻は新聞で大きく報道された。1943年10月29日、朝日新聞の1面に、最初の特攻が、「神鷲の忠烈萬世に燦たり 神風特別攻撃隊敷島隊員 敵艦隊を捕捉し（スルアン島海峡） 必死必中の體當り 機人諸共敵艦に炸裂 誘導の護衛機、戦果確認 豊田聯合艦隊司令長官 殊勲を全軍に布告」と報道された。

6） 特攻隊員は、最初は特別待遇されたが、特攻作戦が長引くにつれ、待遇は悪化していった。そこには軍の特攻隊像の変化があった。「日常化した特攻作戦に、もはや特別な感情を抱かない司令部幕僚や上級部隊の幹部たち。出撃隊員の心情を汲もうとせず、機械的に別盃の儀式を執り行い、おざなりの訓示や激励の言葉をかけるだけ。故障や不調でやむなく帰還し、うなだれる隊員に、非難の文句を投げつける」[渡辺 2007: 236]。

7） 1945年5月～7月、「特攻隊顕彰ならびに遺族援護強化運動」が展開され、特攻隊員出身の自治体に「特攻隊精神顕彰会」が設立された[森岡 1995: 285]。

8） この他、出撃前の待機の際に、行動の「自由」が与えられる、酒や特別食が出る等の特別待遇があった[森本 2005: 197]。

9） 同報告書には、特攻隊員の士気粗漏を防ぐための細かい留意事項が記されている[生田 1977: 210-212]。

10） そうした中でも、「特攻隊志願を航空隊でかたく拒んで生き残つた者もある。上官からは亂臣賊子とののしられ、同僚にはひきょうものとあざけられ、しかも彼は斷固として志願しなかつた」[東大戦歿 1947: 224]。

11） フィリピン方面の特攻の出撃機数 796 機の内、271 機（34.0%）が帰還したという[服部 1995: 581]。その最大の原因は、粗悪な特攻機にあった。戦場を前に不時着する機も多かった。

12) 「そこ（帝大新聞―引用者）には我々の姿を美しいと書いてある。そうかなあと思う」[日本戦没 2003: 344]。彼らは、自らを神と崇める国民（臣民）に不信を抱いていた[保阪 2005: 223]。

13) 「僕が健在であれば勿論の事、もしもの事があってもお父さんお母さん二人の老後は御心配御無用ですから」[真継 1994: 214]。「父上様、私はからうじて家門を汚しはしなかったと確信しています。寧ろ衰へかけた中西家の誉を、一部分とりかへし得たと思ひます」[真継 1994: 42]。しかしその計算は、特攻隊員の殉国という「無私の誠実」を汚すものではなかった。

14) 前掲の陸軍航空本部調査の報告に、出撃直前における特攻隊員の心理に関して、「確実な戦果を期待し『犬死』を惜しむあまり、諸障害に対する感受性が増大して引き返し増大すること」[生田 1977: 211]とある。特攻隊員自身にも、「犬死したくない」という気持が強かった（と思われる）。

15) 軍も特攻を一つの作戦と考えていた。「軍令部全体としては特攻戦法で戦勢を挽回するとは考えていなかった」[森本 2005: 41]。それだけに特攻死の残酷が際立つ。これに対して、特攻作戦は、日本の強烈な抵抗意識を印象づけて、米国との講和を早めるためという解釈がある[森本 2005: 208]。さらに特攻は、米軍に本土上陸作戦を躊躇させ、それが原爆投下を準備したという解釈もある[生田 1977: 250]。

16) 福間は、「死者の言葉を死者の言葉のままに聴こうとする『生者』の姿勢の謙虚さ」[福間 2007: 44]を説く。生者の謙虚さは必要である。しかし、死者の言葉を死者の言葉のままに聴くことは不可能である。

17) 森岡は、これを「価値複合体の分化」と呼んだ[森岡 1995: 286-287]。

18) 死の意味を解釈する諸データは、[青木 2008: 83-87]を合わせて参照されたい。

19) 保阪は、共同体の伝統、文化、自然に価値を置くナショナリズムを、上部構造のナショナリズム（軍上層部の超国家主義）と区別して、下部構造のナショナリズムと呼んだ[保阪 2005: 215]。

20) 「『イエ』の意識は、『世間』にたいする矜持（きょうじ）と葛藤をぬきにして、存在しえなかった」[井上 2007: 93]。国家主義に固められた世間（社会)の前には、家長も無力であった。「非国民」には「村八分」が待っていた。その烙印は一族に及んだ。

21) 草柳は、肉親愛という小さな価値と国家愛という大きな価値が同心円の関係にある、それは儒教思想を土壌とした皇国教育により作られたとした[草柳 1972: 125-127]。

22) 筆者は、前論文でこれを「融和的自由主義」と呼んだ[青木 2008: 88-90]。

23) 大貫はこれを「誤認」と呼んだ。「（特攻―引用者）隊員の側も、国家の側も異なった立場に立つ彼等が同じ一つの象徴から違った意味を引き出していることに気付いていなかった」[大貫 2003: 24]。

24) 航空兵（特攻隊員ではなかった）には、戦争末期の軍隊内で、禁断の書・レーニン『国家と革命』（ドイツ語版）を「一枚ずつ千切って便所のなかで読み、細かく切り刻んで捨てるか、ばあいによっては食べてしまった」[林 1967: 229]者もいた。

25) 森本は、攻撃隊の「十死零生」の隊員と（攻撃機を敵目標まで誘導・掩護する）掩護機の「九死一生」の隊員を対照させ、偶然に指名された前者の不運と後者の幸運を描いている[森本 2005: 192-195]。

**[文献]**

青木秀男,2008,「悶死と散華の間　戦没学徒の意味世界」広島部落解放研究所編『部落解放研究』14 号　79-94.

白鷗遺族会,1992,『雲ながるる果てに　戦没飛行予備学生の手記』日本図書センター.

服部省吾,1995,「第四章第六節　特攻作戦」奥村房夫監修『近代日本戦争史　第四編　大東亜戦争』同台経済懇話会　575-595.

林尹夫,1967,『わがいのち月明に燃ゆ　一戦没学徒の手記』筑摩書房.

辺見じゅん,2002,『昭和の遺書　南の戦場から』文藝春秋社.

保阪正康,2002,「『きけわだつみのこえ』の戦後史」文藝春秋社.

――――,2005,『「特攻」と日本人』講談社.

星野芳郎,1966,「思考切断の悲劇」『朝日ジャーナル』朝日新聞社　8 巻 1 号　43-47.

福間良明,2007,『殉国と反逆 「特攻」の語りの戦後史』青弓社.

生田惇,1977,『陸軍航空特別攻撃隊史』ビジネス社.

井上忠司,2007,『「世間体」の構造　社会心理史への試み』講談社.

海軍飛行（海軍飛行予備学生第十四期会編）,1995,『あゝ同期の桜　かえらざる青春の手記』光人社.

北川衛編,1967,『あゝ特別攻撃隊　死を賭した青春の遺書』徳間書店.

草柳大蔵,1972,『特攻の思想　大西瀧治郎伝』文藝春秋.

桑原敬一,2006,『語られざる特攻基地　串良　生還した『特攻』隊員の告白』文藝春秋.

毎日新聞社編,1979,『別冊一億人の昭和史　日本の戦史・別巻 4「特別攻撃隊」』.

真継不二夫編,1994,『海軍特別攻撃隊の遺書　2060 余名の特攻隊員の人間記録』ＫＫベストセラーズ.

森本忠夫,2005,『特攻　外道の統率と人間の条件』光人社.

森岡清美,1995a,『決死の世代と遺書　太平洋戦争末期の若者の生と死』（補訂版）吉川弘文館.

――――,1995b,『若き特攻隊員と太平洋戦争　その手記と群像』吉川弘文館.

中村秀之,2006,「特攻隊表象論」倉沢愛子他編『戦場の諸相』（岩波講座 5　アジア・太平洋戦争）岩波書店　301-330 .

日本戦没（日本戦没学生記念会編）,1995,『新版　きけわだつみのこえ　日本戦没学生の手記』

――――,2003,『新版　第二集　きけわだつみのこえ　日本戦没学生の手記』岩波書店.

小田切（小田切秀雄・窪木安久編）,1970,『日本戦没学生の遺書』読売新聞社.

大貫恵美子,2003,『ねじ曲げられた桜　美意識と軍国主義』岩波書店.

――――,2006,『学徒兵の精神誌 『与えられた死』と『生』の探求』岩波書店.

Sartre, Jean Paul.,1946, *L'Exintentialisme est un humanisme.* (＝1955, 伊吹武彦訳,『実存主義とは何か　実存主義とはヒューマニズムである』サルトル全集 13 巻　人文書院.)

東大戦歿（東大戦歿學生手記編集委員會編）,1947,『はるかなる山河に　東大戦歿学生の手記』東大協同組合出版部.

安川寿町之輔,1997,『日本の近代化と戦争責任　わだつみ学徒兵と大学の戦争責任を問う』明石書

店.
わだつみ会編,1993,『学徒出陣』岩波書店.
――――,1995,『きけ、わだつみの声　映画の手引き』全国大学生協組合連合会.
渡辺洋二,2007,『特攻の海と空　個人としての航空戦史』文藝春秋社.